
ぺんぺんのマジカル大冒険！

秋月あきら

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ぺんぺんのマジカル大冒険！

【コード】

N7425D

【作者名】

秋月あきら

【あらすじ】

「あの空を泳いでみたいぺん。」あいす大好き。お菓子に囲まれて、ほわほわ暮らしていたペンギンのひな「ぺんぺん」が、てくてく冒険に旅立ちます。夢を叶えることは出来るのでしょうか？

ぺんぺんのマジカル大冒険！

トリのような影が夜空を飛んでいました。

まあ大変！

キラキラ星がお空から落っこちてきます。

影はまだキラキラ星に気づいていないみたい。

ああっ、もう影とキラキラ星がぶつかってしまいそう！

「きゃっっ！」

「ごっつんご！

ビックリした影は手に持っていた大切なモノを手放して、それはどこか遠くへクルクル飛んでいってしまいました。

そして、影も別の場所にクルクル飛ばされて、やがては海に落っこちてしまいました。

影はもうどこにいったってしまったのかわかりません。とっっても心配、影は大丈夫なんでしょうか？

世界のどこかにあるペンギノン王国。

その国ではペンギンたちが楽しく暮らしています。

ペンギノン王国の食いしんぼう、ぺんぺんは今日もお菓子ばかり食べています。

「甘くて冷たくておいしいペーン」

みんなはぺんぺんがなにを食べているかわかるかな？

口の周りにあま〜いクリームをいっぱいつけて、どうやらアイスクリームを食べているみたい。

そこへやってきたのは、みんなのアイドル、アデリーヌちゃんです。

「そんなにお菓子ばかり食べていると、ぶくぶく太って、そのうち体が風船になってどこか遠くへ飛んでいっちゃうんだから」

「がび〜ん!」

ぺんぺんはショックを受けました。

お菓子ばかり食べていると風船になってしまっなんて、今までだれも教えてくれませんでした。風船になって遠くへ行ってしまうたら、ともだちと会えなくなってしまう。

「それはイヤだぺん」

「うふふ、ジョーダンよ」

「なんだジョーダンぺんね、安心したぺん」

そう言っぺんぺんは再びアイスクリームを食べはじめました。まったく反省していないみたい。

あきれ顔のアデリーヌ。

「お菓子ばかり食べていないで、ほかになにかすることはしないの？」

「食べているときと寝ているときが1番しあわせだぺん」

「はあ……なにか夢とかないの？」

夢？

それは叶えてみたいこと。

夢を持つのはとても大切なことです。

けれど、ぺんぺんったら。

「お菓子にいつぱい囲まれ暮らしたいぺん！」

それを聞いたアデリーヌはプイッと背中を向けて帰ってしまいました。

きつとアデリーヌが言いたかったことは、そういうことではなかったのしょう。

みんなはアデリーヌの気持ちがわかるかな？

どうやらぺんぺんはわかっていないみたい。

首をかしげてしまっています。

「なにがなんだかわからないぺん」

理由はわからないけど、アデリーヌが帰ってしまったって、ぺんぺんはちよっぴりションボリ。

でも、アイスクリームを食べる手は止まりません。

ひとりぼっちになつて、ぺんぺんは考えます。
夢ってなんだろう？

夜、眠っているときにみる夢？

ううん、そうではありません。

でも、ぺんぺんは将来の夢と、夜みる夢が頭のなかでゴチャゴチャ。
ヤ。

空を見上げると、青い海が広がっていました。

「あの空を泳いでみたいぺん」

まるで夢のようなお話ですが、ぺんぺんはホンキです。

そんなぺんぺんの独り言を聞いていたペンギンがいました。ツンツンした黄色い羽を頭につけたギンギンです。

ギンギンはいつもサングラスをかけていて、荒っぽい性格をしているから、みんなからこわがられているペンギンです。

「空を泳ぎたいなんてバカだなあ、ムリに決まってるだろ」

「ムリじゃないぺん、がんばればできるぺん」

「おまえは海を泳ぐのだからって苦手なクセに、空なんてもっと泳げるはずがないじゃないか」

たしかにぺんぺんは泳ぐのがあまり得意ではありません。

高い岩場から海に飛び込むことだって、こわいからしたくありません。

みんなが海で泳いだり、高い場所から海に飛んで込んであそんでいるときも、ぺんぺんはいつもお菓子ばかり食べています。

今だつてお菓子を食べてばかり。

「お菓子ばかり食べてると丸々太ってボールになつちまうぞ」

「がびーん！」

ぺんぺんはショックを受けました。

もしもボールになつてしまつたら、なげられたり、けつとばされたり、とつてもイタイ。考えるだけでも、こわくなつてしまいます。

「そんなのイヤだぺん」

「だつたらそのお菓子オレがもらつてやるよ」

食べかけのアイスクリームも、隠し持っていたポテチも、みぐんなギンギンに取られてしまいました。

「返してペーん！」

「空を飛べるようになったら返してやるよ。そんなのムリに決まってるけどな！」

ぺんぺんのことをギンギンはバカにしながら、大きな笑い声を出して帰ってしまいました。

バカにされてもぺんぺんは気にしません。

でも、お菓子を取られてしまったのは、とってもショック。

「がんばって空を泳ぐぺん！」

ぺんぺんの心が燃えています。こんなこと、滅多にないことです。さてさて、ぺんぺんはどうやってお空を泳ぐのでしょうか？

あれこれぺんぺんは考えました。

でも、あまりむずかしく考えるのは得意ではありません。

だから思いついたことをとにかくやってみることにしました。

ぺんぺんは突然、全速力で走り出しました。でも、あんまり早くは走れません。

そして、勢いをつけてぺんぺんはジャンプしました。でも、あまり高くは飛べませんでした。

それどころか、ぺんぺんは着地にしっばいして転んでしまいました。た。

「いたいペーん」

どうやら大失敗みたい。

つぎにぺんぺんはおうちから、おおきなパラソルを持ってきました。た。

パラソルを広げて、高いところからジャンプしようと考えたのですが、ぺんぺんは高いところが好きではありません。

ためしてみる前に失敗です。けれど、もしも高いところから飛んでいたなら、大けがしてしまっていたでしょう。

ぺんぺんはトリさんたちのことを思い出しました。

トリは羽を使って大空を自由に飛ぶことができました。

だから、ぺんぺんも羽があればいいと気づいたのです。

さっそく羽を作ろうとぺんぺんは材料を集めてきました。

ぺんぺんが集めたのは、いっぱい落ち葉でした。

風に揺られてひらひら落ちる木の葉。

羽毛に見立てた落ち葉をノリでペタペタ貼り付けて、大きな羽を作ろうと思ったのです。

手をノリでベトベトにしながら、ようやく落ち葉の羽が完成しました。

さっそくぺんぺんは手に持って羽ばたきました。

しかし、なんとということでしょう。

せっかく作った羽がボロボロと壊れていきます。

落ち葉の羽はとても弱く、力を入れて羽ばたこうとすると、すぐに壊れてしまうのです。

ぺんぺんはガツカリしました。

そこへギンギンがやってきました。

「おい、空を飛べたか？」

「ダメだぺん。でもまだまだあきらめないぺん」

今日のぺんぺんはいつも違います。失敗してもめげません。

そんなぺんぺんをみて、はげますどころか、ギンギンはひどいことを言います。

「バカだな、いくらがんばったってムリムリ。この世で空を自由に飛べるのはトリたちだけなんだ」

「そんなことないぺん。サンタさんのソリを引っばるトナカイさんだって空を走ってるぺん」

「そう言われみれば……けどおまえじゃムリだな。オレにできないことをおまえができるはずない」

「できるぺん！」

さっそくぺんぺんはギンギンがみている横で、自分の体よりもお

おきな紙を広げました。

ぺんぺんは折り紙でトリを作るつもりなのです。そうです、人間の世界では紙ヒコーキと呼ばれているものです。

人間の世界でも、ヒコーキが発明される前から、紙ヒコーキはありました。もちろんそのときは別の名前で呼ばれていました。

ペンギン王国にはヒコーキはありませんが、空を飛ぶ紙ヒコーキのような折り紙があるのです。

空飛ぶ折り紙を折ったぺんぺんは、さっそくそれに乗ってみました。

でも、紙はぺんぺんの重さにたえられなくて、グシャリとつぶれてしまいました。

ギンギンは腹を抱えて笑っています。

「ぎゃははは、本当にバカだな。もしも潰れない折り紙だったとしても、だれが飛ばすんだよ？」

そうです、紙ヒコーキはだれかが投げなくては飛ばないのです。

こんな大きな折り紙、いったいだれが投げられるのでしょうか？
ギンギンはおかしくってたまりません。

もう笑いがとまらなくて、おなかを押さえたまま地面を転がっています。

そこへアデリーヌがやってきました。

「そんなに笑うことないでしょう。ぺんぺんはこんなにがんばっているのよ」

実はアデリーヌ、ぺんぺんのやってきたことを、こっそり見守っていたのです。

すっかり落ち込んでしまったぺんぺん。

「もうダメだぺん」

アデリーヌはぺんぺんにやさしい声をかけます。

「ギンギンにいくら笑われたって気にしちゃダメよ。ねえ、知ってる？」

「なんだぺん？」

「わたしたちペンギンのご先祖さまは、大空を羽ばたくトリだったのよ」

「えっっ！」

とつてもぺんぺんはビックリしました。

でも、ギンギンはそんな話、信じようとしません。

「ぺんぺんのバカがうつったんだな。オレたちペンギンがトリのわけないだろ」

「本当よ、わたしたちペンギンはトリだったんだから」

「オレたちとトリのどこが似てるんだよ？」

ペンギンには空を飛ぶ翼だってありません。

聞かれたアデリー又はちよっと困ってしまいました。

「うーん、クチバシが似てるでしょう？ ほら、足だってどこか似ている気がしない？」

でもやっぱりギンギンは信じられません。

「トリは海の中を自由に泳げないだろ、逆にオレたちは空を飛べないんだ。ぜんぜん違うじゃないか。イヌとネコのほうがまだ似てるな」

「でも……」

アデリー又は言葉につまってしまいました。

みんなはアデリー又の言葉を信じることができかな？

ぺんぺんは信じました。

「ぺんぺんはアデリー又ちゃんのこと信じるぺん」

「ありがとうぺんぺん。きっと努力すればペンギンだって空を自由に飛ぶことができると思うの」

「でも、どうしてペンギンは飛べなくなったぺん？」

「さあ、それはカミサマがお決めになったことだから」

また横でギンギンが腹を抱えて笑いだしました。

「カミサマなんて信じてるのかよ。そんなのいるわけないだろ、バカだなあ」

本当にカミサマがいるのか、それはわかりません。

けど、信じることがきつと大切なのです。
信じ続ければきつと夢だつて叶います。

ぺんぺんは思いつきました。

「そうだぺん、カミサマに会えば飛べるようにしてもらえるぺん！」
それを聞いたギンギンは、あきれてしまって、もう笑うことすら
しませんでした。

「バカバカ、本当におまえバカだ。いないもんをどうやって探すん
だよ？」

「カミサマは絶対いるぺん」

こうしてぺんぺんはカミサマを探して旅に出るのでした。

ぺんぺんの冒険がはじまりました。

とは言っても、じつはご近所さんをグルッと回るだけでした。

どうやらカミサマはご近所にはいないようです。

そんなにはやく見つかったら、ギンギンだってカミサマがいない
なんて言わないでしょう。

もうすこし遠くまで、ぺんぺんはカミサマを探しに行くことにし
ました。

しばらく歩いたところで、ぐうぐうとおなかになってしまいました。

「お菓子食べたいぺん」

でも、お菓子はギンギンに取られてしまっています。

おなかをすかせて歩いてしていると、ぺんぺんは地面に落ちているク
ルクルキャンディーを見つけました。

「今から3秒以内に拾えば3秒ルールが適用されるぺん！」

急いでぺんぺんはクルクルキャンディーを拾いました。

いくら3秒以内に拾っても、やっぱりドロでよごれていて、食べ
られそうにありませんでした。

食い意地がはってしても、おなかを壊すのはぺんぺんだってイヤ
です。

「洗えばきつと食べれるぺん」

さっそくぺんぺんは近くの海に向かいました。

塩水でサッササと洗って、ドロはきれいに洗い落とせました。少し塩味になっちゃうけど、そのくらいは気にしません。

さっそくクルクルキャンディーを食べようとすると、そこへ怖そうなヒョウアザラシがやってきました。

「おい、うまそうなもん持つてるな。俺様にくれよ」
まるでギンギンみたいです。

でも、ヒョウアザラシのほづが体も大きく、迫力がぜんぜん違います。

このヒョウアザラシは、このあたりでも有名なギャングです。ギャングとはとっても悪いことをしている集まりです。

いつの間にかぺんぺんはの周りには、たくさんヒョウアザラシたちが集まっていました。

ここはヒョウアザラシギャングの縄張りだったのです。悪いギャングたちが、なにもしないでぺんぺんを帰してくれるわけがありません。

このまま捕まってしまうえば、きつとこわくていたい目にあわされてしまいます。

ぺんぺんはブルブルふるえ上がりました。
ノツシノツシと大きな体でヒョウアザラシがせまってきます。

こわくてぺんぺんはその場を動けません。
そのときでした！

岩場の影からギンギンがあらわれたのです。
ギンギンはじょうずに岩場をピョンピョンとんで、ぺんぺんのそばまでやってきました。

「おい、さっさと逃げるぞ！」
ギンギンはぺんぺんのことを引っぱって逃げ出しました。

まさかギンギンに助けてもらうなんて、ぺんぺんもビックリひとみをまん丸にしています。

「どつしてギンギンがいるぺん？」

「べ、べつにおまえが心配になっついてきたんじゃないからな」
本当はどうなのでしょう？

なぜギンギンはぺんぺんのあとを、ついでたのでしょうか？
ギンギンは運動神経も抜群で逃げ足もはやいのですが、ぺんぺんはモタモタして足がじょうずに動きません。

すぐにヒョウアザラシたちに追いつかれてしまい、岩場の行き止まりに追い詰められてしまいました。

大変です、もう逃げ場はありません。

そんなときでした。

岩場の影から小さなペンギンが現れました。

「弱い者イジメはやめなさい！」

女の子のペンギンです。アデリーヌではないようです。もっと小柄のペンギンです。

ヒョウアザラシがこわい顔をしてその女の子をにらんでいます。

「おまえ、どこのだれだ！」

「どこのだれかと聞かれたら、名乗ってあげようあたしの名前。フエアリーペンギンのアイドル、まほう使いドロシーちゃんよ！」

それを聞いたぺんぺんはおめめをキラキラ。

「まほう使いかっこいいペーン！」

「そんなのウソに決まってるだろ」

と、ギンギンはぺんぺんの頭をゴツンをなぐりました。

「いたいぺ〜ん」

ドロシーは本当にまほう使いなのでしょう？

それはまだわかりません。

だって、まほうをみせる前にギャングたちにとらえられてしまったからです。

「いや〜ん、つかまちやった。だれか助けてー！」

助けてにきたのに、助けてほしいだねんで、元も子もありません。このスキに、ギンギンはぺんぺんとゴツソリ逃げようと思いました。が、ぺんぺんがモタモタしている間に、ヒョウアザラシに気づかれ

てしまいました。

「逃げられると思うなよ！」

とつてもおおきな声でこわいです。

このときばかりは、ギンギンもふるえ上がってしまいました。

ヒョウアザラシはこわい肉食動物です。

もしかしたらぺんぺんたちは晩ごはんにされてしまうかもしれない。
せん。

ぺんぺんはとつてもかなしくなりました。

もう大好きなお菓子も食べられなくなるかもしれない。

お菓子はギンギンに取られてしまいました。

もつとたくさんお菓子を食べておけばと後悔しました。

ここでぺんぺんはあることに気づきました。

「そう言えばお菓子持ってるぺん」

そうです、拾ったクルクルキャンディーがあるではありませんか。

ぺんぺんはクルクルキャンディーを食べようと思いました。

そのとき、ドロシーがさけんだのです。

「食べちゃダメ！ それあたしが落としたまほうの杖！」

まほうの杖とは、まほう使いがまほうを使うときに使う杖です。

でも、ぺんぺんが持っているのは、どうみてもお菓子でした。

けれど、ぺんぺんはすぐに信じました。

「すごいぺん、これがあればぺんぺんもまほう使いになれるぺん！」

ぺんぺんはクルクルキャンディーをひとふりして、おねがいごと
を言いました。

「空をびゅーんと泳ぎたいぺん！」

するとどうでしょう。

ぺんぺんの体が宙に浮き、びゅーんと遠くへ飛んでいってしま
いました。

こうしてぺんぺんは夜空のお星さまになったとき。

残されたギンギンとドロシーはその後、どうなってしまったのか
わかりません。

おしまい。

「つて、ちょっと待てよ！」

ギンギンがさげびました。

ついでにドロシーもさげびました。

「ちゃんとあたしたちのこと助けなさいよ！」

すると、ペンペンが世界を一周して戻ってきました。

「こ、こわかったペン。もう空を泳ぐなんてこりこりだペン」

ペンペンはガクガクブルブルです。

あきれてしまったヒョウアザラシたちですが、気を取り直してペンペンたちに、おそいかかってきました。

とつてもこわい思いをしたペンペンは、もうヒョウアザラシなんてこわくありません。

ペンペンはクルクルキャンディーをひとつりして言いました。

「お星さまがふってくるペン！」

すると空からこんぺいとみたいな星粒がふってきて、ヒョウアザラシたちの頭にチクチクささりました。小さくてもとつてもイライです。

さらに逃げようとしたヒョウアザラシは、地面に落ちていた星粒をふんづけてしまい、またイタイ目にあってしまいました。

「いたた、いたた、もうかんべんしてくれよ」

ヒョウアザラシたちは涙目になってしまいました。

空から落ちてくるキラキラ星をみたドロシーも、トラウマを思い出して涙目です。

きつとドロシーはドロシーで、ここに来るまでの間に大冒険があったに違いありません。

たとえば、なにもみえない夜の海で、海流にのみこまれて死にか

けるとか。

さらにサメやシャチに追いかけて回されて死にかけるとか。あくまでたとえ話ですが……。

ぺんぺんはヒョウアザラシたちを、ゆるしてあげようと思いましたが。

「もうわるいことしちゃダメぺんよ？」

「もうわるいことしねえよ、俺様たちがわるかった」

どうやらヒョウアザラシたちも反省したようです。きつとギャング団も解散することでしょう。

しかし、ほつとしたのもつかの間。

なんと反省したはずのヒョウアザラシが、ぺんぺんのスキをみておそいかかってきたのです。

「あぶないぺんぺん！」

おそわれそうになったぺんぺんをギンギンが押し飛ばしました。

ヒョウアザラシのするどいキバが、ギンギンにかみつこうとしています！

ぺんぺんはクルクルキャンディーをひとつりして言いました。

「ヒョウアザラシさんたち、みんなびゅーんぺん！」

すると、ヒョウアザラシたちの体が宙に浮き、びゅーんと遠い空へ飛んでいってしまいました。

こうしてヒョウアザラシたちは夜空のお星さま、ギャンググスターになったとさ。

大活躍をしたぺんぺんは、たくさんがんばったので、おなかがいっぱいになりました。

なのでぺんぺんはクルクルキャンディーを、ひとつちで食べてしまいました。

「ガリガリ、おいしいぺーん」

それをみたドロシーは顔が真っ青です。

「ああああっ！ あたしのまほうの杖ええええっ！！」

「ごめんぺーん。けど、おしかったぺん」

おいしければよかったというものではありません。

ドロシーはガックリ肩を落としてしまいました。が、ぺんぺんをおこる気にはなれませんでした。だって、なにはともあれ、ぺんぺんは命の恩人なのですから。

「食べてしまったものはしょうがないわ。スティックさえあれば、アメなんて作り直せるんだから」

棒だけになってしまったまほうの杖を、ドロシーは返してもらいました。

そして、ドロシーはお別れを告げました。

「それではお世話になりました。アタシは仕事があるので先を急ぎます」

ペコリと頭を下げているところとするドロシーを、ギンギンが呼び止めました。

「おまえいつたいたいなものなんだよ？」

「あたし？ あたしはサンタさんの諜報部員よ。簡単にいうと、サンタさんからプレゼントもらえるよい子を、1年をかけて調べる仕事をしている……っていうのはココだけのヒミツね」

こうして今度こそドロシーはいいこととしましたが、ふと振り返ったのです。

「そうそう、ぺんぺんは今日とっても良いおこないをしたわ。きっとサンタさんからプレゼントがもらえるわよ」

「やったぺん！」

けれど、その横ではギンギンがスネた顔をしていました。

「どーせオレは今年もプレゼントなんてもらえないんだ」

「さあ、それはどうかしら？」

ドロシーはギンギンに笑いかけました。

そして、ドロシーはまほうを使ってびゅーんと……飛べませんでした。

「食べられちゃったから、まほうがつかえないんだった」

恥ずかしそうな顔をしてドロシーはぺんぺんたちに手をふる。

ぺんぺんのマジカル大冒険！

ぴよこぴよこと歩きながら去ってしまいました。

そうだ、ぺんぺんは空を飛んだのですから、お菓子を返してもら
えるはずですよ。

「ぺんぺんのお菓子返して欲しいぺん」

「もう全部食べちゃったよ」

「がびーん！」

こうしてぺんぺんの大冒険を幕を閉じたのでした。

ほんとにおしまい。

ぺんぺんのマジカル大冒険！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7425d/>

ぺんぺんのマジカル大冒険！

2009年7月1日21時18分発行